

# Bestopia

小原靖夫

ベストピアは小原靖夫の  
個人誌です。

平成二十三年一月  
第二八七号

## 1. 今年の年賀状

ハムレットで有名な言葉、to be or not to be that is the question 和訳を3つ引用しました。角川文庫新訳ハムレットの巻末には40の和訳があり、その33番目が1972年小田島雄志の名訳「このままでいいのか、いけないのか、それが問題だ」です。

折しも、日本経済新聞では元旦から『三度目の奇跡』という素晴らしい連載が始まった。キーワードは「現実を直視、今年こそ！」だと感じています。

問題の2012年を間近に控えた今年こそは、何かをしなければならない、何かを変えねばならないとの意識が多くの人々に共有されることになるでしょう。

## 2. 歴史に学ぶ

歴史は繰り返すと言われますが、今の時代は1930年前後からの10年間によく似ています。私の専門の一つである賃金(俸給)の側面から、その時代を眺めてみます。参考文献は「男子の本懐」(城山三郎著)です。本著は濱口雄幸と井上準之助の伝記を通して昭和初期の歴史を克明に描いた傑作です。

1929年(昭和4年)7月2日濱口雄幸が首相になったとき、懇願されて大蔵大臣になったのが井上準之助で、大方の予想とは違った、その時代の世相からは困った登用でした。二人の熱くて純な友情と政治家の使命感がこの大作の底流にある、感動ものです。

この年の10月24日はニューヨークウォール街での株式の大暴落、アメリカ発の

世界大恐慌が始まるという大混乱があった年です。

## 3. 濱口雄幸内閣の使命

どの内閣にも、それぞれ難問があるが、濱口内閣は内外に特別の問題を抱えていた。国内の問題は先送りされたものばかりであった。

### ① 金本位制度への復帰

1917年(大正6年)以来の最大の懸案、どの内閣も避けてきた難題である。

「金本位制度は、火の利用と並ぶ人類の英知」と評されており、第一次世界大戦後一度は否定されかかったが、間もなく米英を始めとして多くの国が復帰しており、日本は遅れに遅れ国際社会から不信、不信頼を募らせていた。1930年(昭和5年)1月10日金解禁を実施した。

### ② 軍縮

1930年(昭和5年)ロンドン軍縮会議を控えて、米英は軍縮を望んでいたが、日本の軍部はその内容が米英に有利であるとして猛反対をしていた。日本は日露戦争のおり、英国から多額の借款があったが、その借り替え時期が迫っており、英米に反対はできなかった。元より濱口、井上の両名が求めたものは「東洋の強大な君主国」ではなく、民主的な平和愛好国とした国際社会に共存する姿であった。井上の言葉を使えば対外的にも内政的にも『民主的な動きが正しき道を進めば、国は安全にして、国民は幸福を享受しうる』という考えである(p329)。再三の大幅な軍縮予算を通したため軍の反発は力を増していった。

### ③ 緊縮財政

金解禁に備え徹底した緊縮が必要であった。公債は一切発行せず、剰余金の取り崩しもしないという今では全く考えられない予算編成を実行した。

1929年(昭和4年)の前内閣がたてた次年度の予算は、17.7億円

1930年(昭和5年)7月からの濱口内閣の修正予算は、16.8億円

1931年(昭和6年)度の予算は、14.1億円、予算が14億円台に切り詰められたのは1913年(大正12年)以来のこと、公債をやめたのは16年振り、剰余金の繰入までやめたのは、1890年(明治23年)以来のことであった。常に大幅なカットの対象となった軍部の予算に対しての反発は根深いものになっていった。

(参考のため1932年(昭和7年)の予算は13.3億円、1929年(昭和4年)と比較すると20%以上もの節約になっている。)

## 4. 濱口雄幸、井上準之助の覚悟

### 浜口の覚悟

自分は大命を受けた以上、決死の覚悟で事に当たるつもりでいる。思う存分やり抜いて、総理としての責任を果たす覚悟だ。すでに決死だから、途中、何かおこって中道で斃れるようなことがあっても、もとより男子として本懐である。ただし、これは自分だけの覚悟ではなく、みなもそのつもりで居て欲しい。自分に万一のことがあっても決してうろたえることのないよう、くれぐれもたのんでおく。7/2夜談

### 井上の覚悟

客が帰ったら、話したいことがある。今夜は寝ないで、待っていてくれ。いつもは、先に休むようにと言っていたが、この夜だけは違った。今度の大蔵大臣役は、ちょっと命が危ないかも知れん。自分にもしもの

ことがあったとき、後に残ったおまえが、まごつくようでは、みっともない。今夜は、家の財産について、全部おまえに話し、書類も渡しておく。家のことはこれから先、すべておまえに任せた。おまえの思うようにやってくれ。

## 5. 濱口雄幸内閣の率先垂範

### ① 機密費の削減

前内閣の半分以下に削減している。

### ② 料亭政治の廃止

### ③ 公用車の減少

各省で10台から20台あったが5台以下とする。その他諸々の率先した緊縮を実行、このような政府の節約も「濱口の人柄もあり、使命感、危機感が各閣僚にしみこんでいたせいもあって、内閣としては極めてまとまりがよかった」(p349)。

## 6. 官吏の俸給削減

1929年(昭和4年)10月15日、衝撃的な政府発表がおこなわれた。官吏の俸給、年俸1,200円以上の者を対象として6%から10%を減ずるとの内容である。

|               |      |
|---------------|------|
| 年俸 1200 円     | 据え置き |
| 年俸 1400 円     | 6%減  |
| 年俸 1600 円     | 7%減  |
| 年俸 1800 円     | 8%減  |
| 年俸 2000 円以上   | 10%減 |
| 各省大臣(8000 円)  | 12%減 |
| 総理大臣(12000 円) | 16%減 |

官吏の俸給は第一次世界大戦勃発以来の物価騰貴に伴って度々引き上げられたままである。大正9年(1920年)からは逆に物価が下落を続け(9年間で37%も下落)ているにもかかわらず高く据え置かれた。

減俸案は、濱口と井上の二人が互いに尋常な政治家ではないことを確認し合い、同

体になって燃え上がった。二人が燃えた分だけ、他の閣僚や政府関係者がとりのこされ冷え込む形となった。

節約型の実行予算を執行したせいもあって、税収が落ち込んでいる。だが、公債は発行しない建前である。緊縮一色の中で義務教育費の増額は公約どおり実現したい。その財源は当面、政府全体の人件費の中から絞り出す他ないという判断であった。

金解禁のための重要なプログラムでもあり、政府自ら範を垂れねばならないと考えた。反対の狼煙は、公務員ばかりでなく、民間からもあがった。マスコミが減俸問題を国民全体への挑戦と受けとり、大々的な反対のキャンペーンをはった。右から左までまさに超党派の反対、国をあげて反対の大合唱であった。

いちばん強行で組織的な反対に立ち上がったのは検事など司法官であった。当時、司法官は行政官にくらべて実質的な給与が低く、待遇改善要求が繰り返し行われていた。

軍人も、文部省教育官（司法官よりも低い給与であった）も反対運動にたちあがった。しかし、官吏の率先垂範をとりやめるわけには行かない、絶対に変更できないと二人は頑張った（p 278）。

浜口は、自分の延長線上に官吏というものを考えていた。清貧に甘んじ、国のためには身を殺して、黙々と率先垂範する、というような。しかし、官吏もまた人の子であった。

軍部の反発も強くなっていき、元老西園寺公望からも忠告されることになった。「官吏の反対まで考え及ばなかったことは、慚愧に耐えず、責任をとりたい。」と漏らした。井上とも心を熱くして議論しあった。10月22日、閣議の後、政府は簡単な声明を発表した。「世論の趨向に鑑み本日の閣議に於いて之を取止むる事とせり」

この件は、浜口内閣においては実行されなかった。次の首相若槻内閣の大蔵大臣井上準之助が実行した（1931年(昭和6年)6月1日 3%の減俸実施）。

## 7. 濱口雄幸狙撃事件

昭和5年11月14日 東京駅現在の東北新幹線改札付近、愛国者社員によってピストルで3挺の距離から銃撃、骨盤を砕き東大病院で腸の30%を摘出手術がなされた。大正10年11月4日(1921年)原敬が東京駅で襲撃され刺殺され、その時以来首相が乗降するときにはホームには一般客を入れないようにしていたのだが、浜口になってから、とり止めさせていた。それが仇となった。ホームでの苦しみの間に、近くの鉄道病院の医師が「総理、たいへんなことに」とつぶやくと、浜口はうすく目を開けていった。「男子の本懐です」。その時、幣原外相は駐ソ大使広田弘毅を送るために東京駅にいて、ホームからかけつけた。濱口は「男子の本懐です。」と漏らし、「予算閣議もかたづいたあとだから、いい」といった。夫人夏子は、この旅行に、いつもになく不安を感じた。いや、不穏な動きを伝える噂があり、事実、10日前には短刀を持った男が官邸に忍び込もうとしたところを捕らえられた。このため、首相官邸の塀に鉄条網をめぐらしたばかりでもあった。「世間がだいぶ物騒なようでございますから、十分警戒なさって、お身にまちがいのありませんように」浜口は軽くうなづきはしたものの、「政治家だからな。どういことがあるか知れん。それに、いくら警戒しても、やられるときにはやられる」覚悟はできている。

入退院を繰り返し一度は復帰するも（3月9日から27日）様態は悪化の一路をたどり、見かねた人々から引退の声があがった。浜口辞任を強く主張したのが、他なら

ぬ井上であった。「これ以上苦痛を味わせてはならず、心おきなく治療に専念できるように、一日も早く国事から解放してやるべきである」第59議会1931年(昭和6年)3月27日を最後に静養に専念するも容体は改善することなく、1931年(昭和6年)8月26日死亡、その最後は特に感動を呼ぶ。8月20日、浜口は子供たちをよび、死後のことなどについて、はなした。絶筆の書は5人の子に既に渡してあった。25日の昼には、夏子と娘だけを集めて、自分の人生を振り返り、残された者の生き方について、絶え絶え話した。当日26日の朝、浜口は娘の富士子に「英国の協力内閣は出来たか」と尋ねた。イギリスの金本位制度の存続が危ぶまれていたからである。11時半、激しい発作が起こり、危篤に陥った「みんなの顔がまだ見えるぞ」というのが、最後の言葉であった(p431-432)。

8月29日秋風の立つ土曜日、葬儀は日比谷公園で営まれた。久世山から日比谷までの沿道には、別れを惜しむ人垣が続き、それに応えるため霊柩車はスピードを10キロ以下におとさねばならなかった。式の終わったあと、一般の告別に移ると、待ちかねていた数万の民衆が霊前に殺到し、老人子供の悲鳴が上がり、配置されていた警備隊だけではならず、急いで丸の内署や警視庁から増派される有様で、2時間経っても、なお告別の列が延々と続くため、やむを得ずそこで打ち切って、葬列は青山墓地に向かった(p433)。

いかに人気のあった首相であったかが手に取るように判ります。

## 8. 井上準之助の

### 官吏俸給減俸実施と狙撃事件

後任の首相選びは難航した。若槻は重病人の浜口の熱意に負けた形で第二次若槻内閣を組閣した。1931年(昭和6年)4

月14日(第一次若槻内閣は1926年1月大正15年)。

大蔵大臣は井上が続投、再度、官吏の1割減俸案を提出、反対は前回以上の激しさとなる。

5月2日夜10時すぎ、三河台の井上の私邸で、物置が爆破された。半月後犯人は逮捕された。井上が庶民の生活苦の責任者であると思い、ダイナマイトを仕掛けたというのだがこの犯人と共謀の嫌疑で一人の陸軍中尉が浮かび上がった。この中尉は取り調べの後、割腹自殺を遂げた。背後関係もつかめない不気味な幕切れとなった。

5月6日には、抜き身の短刀が、井上の邸に送られてきた。井上は「狙われるのは、覚悟していた。国民ににがい薬を飲ませるのだから、反感を買うわけだ。チェコスロバキアでも、金解禁で大蔵大臣が殺された。」

悪夢---減俸案---の再来に対して、世間は騒然とした。前回より減俸の対象が広がったので敵の範囲も拡大した。昭和6年5月26日の閣議はもめ、7時間にも及んだが、「月100円以上、最低3%」などと若干手直しした上で減俸が決定、若槻首相は「官吏の減俸は実に今日の一般国民生活の苦悩にたいし、官吏も又その犠牲を分担して難局の打開に努力するのやむなき事情であることを認めたからであります(p417)。轟々たる反対の中、減俸は6月1日実施された。

今度は省の統廃合を中心とする行政整理に取り組んだ。「民主的な社会では、安上がりの政府が理想である。」枢密院も、統帥権をもつ軍隊も、放漫な政府も精算するとの信念に基づく、政府の率先垂範、効率化、緊縮の総仕上げに着手した。

政治家には政治家にふさわしい断乎たる意志と、節を守ってたじろがない勇気があると腹の座った井上の英断の連続であった。

しかし、軍部の反発は、満州事変へと拡

大の一途であった。1931年(昭和6年)12月11日若槻内閣は総辞職に追い込まれる。元老西園寺公望は後継内閣を政友会の犬養毅を選んだ。大蔵大臣は高橋是清、発足間もなく金輸出再禁止を行った。

そして、これ以後の日本経済は、まさに井上準之助の予言どおり、はてしないインフレへところんで行った。

1932年(昭和7年)1月8日国会は解散、総選挙は、2月20日と決まった。民政党では、井上が実質的な大黒柱であった。反対勢力にとっては不気味で好ましからざる存在であった。近い将来、必ず軍縮や緊縮をひっさげて再登場してくることであろう。野に在るからといって、見逃すわけには行かない。ある結社は新聞半ページ代の広告で「井上前蔵相をようちょうせよ」と訴えた。不穏な気配があった。

1932年(昭和7年)2月9日、凍るような寒さの日、早めに夕食を終えて待っているのに、予定の時刻を過ぎても、迎えの車が来ない。井上はいらいらして「こんなにおそけりゃ、もう行かんぞ」と家族が見たこともない激しきで怒った。遅れてきた車を急がせ、会場である本郷駒本小学校へ着いた。そして、車から下りて、数歩歩いたとき、一人の男が群衆の中から飛び出し、拳銃を三発打ち込んだ。即死同然であった。半年と経たぬうちに、浜口邸の悲しみの再現である。あのとき男泣きに号泣した井上をめぐる、いまは泣き声がひろがる(p462)。

アメリカのモルガン商会総支配人ラモントからの弔電には「日本はいまや、もっとも忠実なる一人のパブリック・サーバントを失った」と在った。

ヘラルド・トリビューン紙の見出しは、こうである。「イノウエ、日本近代化のチャンピオン、演説会場で暗殺さる」(p464)

## 9. 濱口雄幸と井上準之助の墓

青山墓地東三条。木立の中に、死後も呼び合うように、盟友二人の墓は、仲良く並んで立っている。位階勲などを麗々しく記した周辺の墓碑たちとちがいで、二人の墓碑には、『濱口雄幸之墓』『井上準之助之墓』とただ俗名だけが書かれている。よく似た墓である小説『男子の本懐』は、この簡潔な単文で印象的に終わっています(p464)。

## 10. 当時の社会情勢

### ① 気候

1929年は異常気象で暑さひとしおであった。30度を超す日が20日以上連続の熱帯夜。浜口首相は冷房はもちろん扇風機も置かず、涼をとるのは、大きな団扇だけであった。井戸が涸れ、氷と西瓜がとぶように売れ、一方、疫痢と脳炎のため、幼児の死亡が増えた。

### ② デフレ経済

「デフレ政策を行って、命を全うした政治家はいない」古来から言われている。容易ならぬ覚悟が必要であった。不景気を恨む民衆にまぎれて軍が襲いかかってくるものが予想された(3-③緊縮財政を参照)。

### ③ 大学はでたけれど

失業統計は完備されていなかったが、就職率は27%という低さ。

この年の大学専門学校卒業生の就職率、法文系では、前年の46.3%から38.1%へと落ち込みこの、失業者は増えるばかりであった。東京商大の8割は例外として、東京帝国大学で6割から7割、他の大学では3割から5割見当と言われ、学生たちは伝手をたよって、就職運動に駆け回っていた。

### ④ 昭和5年の秋の経済状況

ビルの空室率、丸の内界限でも2-3割、この春完成した海上ビル新館は、半分もふさがらない。8割空室というビルもあった。一年前迄は満室であった。給与のカット、

三井系の大企業でも、2割、退職金の半減などの措置を執るところも出てきた。

10月1日の国勢調査の際、東京市で確認された浮浪者数、1700人、大正14年(1925年)の5倍。都会で職にあぶれた人々は、やむなく郷里へ帰ろうとする。だが汽車に乗る金さえなく、東海道などの主要街道は、妻子を連れて歩いて帰る姿がめだった。見かねて街道筋で粥の接待をする村もある。戸塚警察署前の東海道を歩いて郷里に向かう人数は、日に30人。その先、藤沢の遊行寺でも、どんぶり一杯の麦ご飯を出したが、そのほどこしを受ける人は、多いときに60人。そして、境内で野宿していくのが、毎夜30人を超えた。

生糸の暴落もあって農村も不況に苦しんでいた。そこへ、都会からの帰郷者を抱えこまねばならない、やむを得ず生活費まで借金するようになり、全国農家の借金総額は50億、(国家予算は14～15億の時代、年予算の3倍を越える額である)。

#### ⑤ 対外政策—軍部の動き

張作霖の事件(1928年(昭和3年))以来、関東軍の動きが不気味であったが、1931年(昭和6年)9月18日、満州事変が勃発、関東軍は政府や軍中央の不拡大方針を無視、約束した停止線を次々に越え、とめどもない進軍をはじめた。金本位維持のため、緊縮路線の仕上げにかかっていた若槻内閣、井上大蔵大臣の体制をはげしく突き崩すこととなった。そして、この勢いは、1932年(昭和7年)の5.15事件、1936年(昭和11年)の2.26事件を経て第二次世界大戦へと繋がっていきます。

以上の概観から、今日の日本と類似しているところと違っているところが浮き彫りになってきます。現下の我が国は、「失われた20年」の言葉のようにデフレ経済が続いています(昭和6年頃の物価下落率は大正9年から35%と今より深刻であった)。

来年度の大卒就職率は60%位、貧富の格差は格段にひらいています。(昭和6年頃はもっと劣悪であった)国の財政は強烈に劣悪化していますが平和が維持されています。国民が直接戦争に係わることのない66年がつづいています。正式な軍隊組織はなく自衛隊の予算規模はGDPの1%程度に押さえられており、かつてのように軍部の圧力や独走はありません。それに変わる新しい問題、①人口減少と少子高齢化の同時進行 ②年金など社会保障制度の破綻に現実味 ③10年を超えるデフレ ④20年後にはGDPが中国の4分の1に ⑤国家、地方の債務残高、数年内にGDPの2倍に、等を抱えています。

その問題の克服は奇跡の力が必要であると日本経済新聞では元旦から「第三の奇跡」という特集をはじめ、どこにその力があるのかを検証しています。次号ではその内容を纏めて紹介します。

#### 11. リーダーの役割、使命感

濱口雄幸、井上準之助の政治姿勢は誠にステイマンであり、真摯で使命感に満ちており、軍隊という組織をもちながら、その相克のなかでも、将来にわたって国民の幸せを考え己を捨てて政治に取り組んだモデルです。ともかく戦争に直接係わることなく平和を守ってきた日本という国を歴史に残さなくてはならないと私は考えています。その為には人口減少下の我が国では「小さな政府」「無駄のない政府」が望まれます。「第三の奇跡」のヒントが濱口—井上コンビに有ると考え「男子の本懐」を読み直し紹介しました。尚、昭和22年4月18日、極東委員会において、日本経済の水準を昭和5—9年の間におく方針が決定されています。その意味からも、本著『男子の本懐』は、多くの人々に再読されることを期待しています。新潮文庫は650円です。